



[果樹部門]

[農業研究所ホームページへ](#)

10. ブドウ晩腐病に対する果粒大豆大期の有効な防除薬剤

[要約]

簡易被覆栽培で発生するブドウ晩腐病に対して、果粒大豆大期にセイビアーフロアブル 20 を組み込んだ体系は防除効果が高い。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 病虫研究室

[連絡先] 電話 086-955-0543

[分類] 技術

[背景・ねらい]

県内の簡易被覆栽培ブドウにおいて、晩腐病による被害が恒常的に発生し問題となっている。そこで、特に感染リスクが高い果粒大豆大期に防除効果が高いセイビアーフロアブル 20（以下セイビアー）1,000 倍を組み込んだ防除体系の効果を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 簡易被覆栽培ブドウの防除体系（表1）において、果粒大豆大期に散布する薬剤としてセイビアー1,000 倍を用いた場合、対照区のフルーツセイバー1,500 倍よりも発病が低く抑えられ（図1）、本剤を果粒大豆大期に組み込んだ防除体系は、晩腐病に対して有効であった。

[成果の活用面・留意点]

1. 晩腐病の果実への感染は5月下旬～7月上旬に生じるため、開花前～袋掛け前は定期的な防除が必要である。また、本病は袋掛け後にも感染するため、袋掛け後の銅剤散布を必ず実施し、収穫が遅れないよう適期収穫を心掛ける。
2. マンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤またはペンコゼブ水和剤）と組み合わせた防除体系の効果は高いが、果粉溶脱及び汚れが生じる恐れがあるため、マンゼブ水和剤は果粒小豆大期、本剤は果粒大豆大期までに散布する（表2）。
3. 本剤は対照区のフルーツセイバーと比較して、褐斑病に対する防除効果が劣る場合がある。
4. 巻きひげ除去、早めの袋掛け、袋の止め金をしっかり巻くなどの耕種的防除も併せて行う。



[具体的データ]

表1 果粒大豆大期にセイビアーフロアブル 20 を組み込んだ殺菌剤の防除体系の例

4月上旬 (発芽前)	5月下旬 (開花前)	6月上旬 (小豆大)	6月中旬 (大豆大)	6月下旬 (袋掛け前)	7月中旬 (袋掛け後)	8月上旬 (袋掛け後)
ベフラン液25	ポリベリン水	ペンコゼブ水 フルピカF	試験区： セイビアーF20 対照区： フルーツセイバー	オンリーワンF ランマンF	ICボルドー66D (アピオンE加用)	ICボルドー66D (アピオンE加用)

注) 薬剤の希釈倍率：ベフラン液 25 250 倍、ポリベリン水 1,000 倍、ペンコゼブ水 1,000 倍、フルピカ F 2,000 倍、セイビアーF20 1,000 倍、フルーツセイバー 1,500 倍、オンリーワン F 2,000 倍、ランマン F 2,000 倍、IC ボルドー 66D 50 倍、アピオン E 1,000 倍。表中の「液」は「液剤」、「水」は「水和剤」、「F」は「フロアブル」の略称である

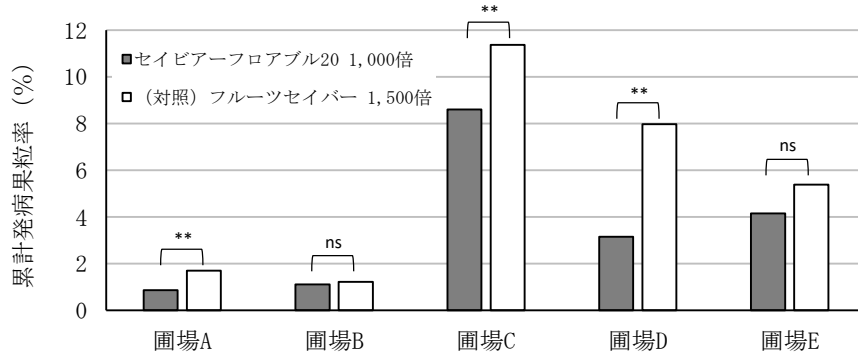


図1 防除体系における果粒大豆大期の薬剤がブドウ晩腐病の発生に及ぼす影響

注) 試験場所：圃場 A、B 及び C；農業研究所病虫研究室圃場、圃場 D 及び E；現地圃場

試験年：2019～2020 年、品種：ピオーネ（簡易被覆）、発病程度：中～多発生

各圃場における、その他の薬剤散布は現地慣行による

図中の**は χ^2 検定により有意差があることを示し (p<0.01)、ns は有意差がないことを示す

表2 セイビアーフロアブル 20 1,000 倍の散布時期が果粉溶脱の発生に及ぼす影響

散布日	6月2日	6月12日	6月23日
生育ステージ	果粒小豆大	果粒大豆大	袋掛け前
果粉溶脱程度	－～＋	±～＋	＋～＋＋
果粉溶脱状況			

注) 試験場所：農業研究所病虫研究室圃場、品種：ピオーネ（簡易被覆）、調査日：2017年9月19日

散布方法及び散布量：背負い式電動噴霧機を用いて10a 当たり 250L 散布した

調査基準：－, ±, +, ++, +++ の5段階で評価し、++以上で実用上問題がある

[その他]

研究課題名：簡易被覆栽培ブドウにおける晩腐病の防除対策

予算区分・研究機関：交付金・平 30～令 2 年度

研究担当者：苧坂大樹、金谷寛子、桐野菜美子、高田真里、畔柳泰典

関連情報等：1) 試験研究主要成果、[平 27 \(59-60\)](#)